

機関番号：17401
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20320006
 研究課題名（和文） 日本の生命倫理諸議論における基礎的概念の再検討に基づく生命倫理論の構造化
 研究課題名（英文） Structuration of bioethical arguments in Japan based on the reexamination of the basic moral concepts
 研究代表者
 高橋 隆雄（TAKAHASHI TAKAO）
 熊本大学・大学院社会文化科学研究科・教授
 研究者番号：00145278

研究成果の概要（和文）：

日本の生命倫理の議論を、終末期医療、生殖医療などの諸領域にわたり、実践レベル、具体的原理レベル、抽象的概念レベルの三層構造の分析によって解明することで、抽象的議論を回避するボトムアップ的な日本の生命倫理の特徴を明らかにすることができた。また、各レベル間の関係の究明により、いわゆる生命倫理原理の普遍性は中間のレベルに妥当すること、さらに現場での実践レベルと抽象的レベルの親近性が明瞭になった。

研究成果の概要（英文）：

We analyzed bioethical arguments in Japan through various areas such as end-of life care, reproductive medicine, medical genetics and based on three level analysis, i. e., the level of medical practices, concrete principles and ethical theories, and so we made clear the feature of bioethics in Japan, such as bottom up character. Also we found out, by reexamining the relationships among three levels, that so called bioethical principles are universal because they are abstracted from various practices, and that the first level and the third level are closely connected with each other.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,300,000	1,590,000	6,890,000
2009年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2010年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	13,000,000	3,900,000	16,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：日本の生命倫理 三層構造 構造分析

1. 研究開始当初の背景

生命倫理がアメリカに登場して以来30年以上経過し、現在では日本に定着しつつあるが、次第にアメリカ由来の特徴と日本の諸制度、思想、慣習との齟齬が顕著になってきている。こうした問題に対して、これまでは

インフォームド・コンセント、病名告知、患者と家族の関係の強さなどにおける日本の医療現場の特徴を個別に取り上げてきたが、それらを総体的に、かつ理論的に考察する研究は皆無であった。この課題に対しては、日本の生命倫理の諸議論を三層構造分析を

通じて徹底的に構造化し、生命倫理一般に普遍的な事柄と日本に特殊な事柄を、構造自体を含めて解明する必要がある。本研究グループは、熊本大学生命倫理研究会（H. 9年発足）を母体として、これまで多くの研究会、セミナーを開催し、その成果を7冊の生命倫理論文集として刊行してきたため、日本の生命倫理の議論の全体層の解明に適していた。

2. 研究の目的

日本の生命倫理の諸議論を、終末期医療、遺伝・生殖医療、看護倫理、精神科医療と脳神経倫理、制度と専門職等の領域にわたって、そこでの言説を（1）医療現場での実践や直感的道徳判断、（2）具体的原理、たとえば、ピーチャム&チルドレスの4原理として知られる「自律尊重」、「無危害」、「善行」、「正義」に「尊厳の尊重」、「連帯」などを加えたもの、（3）抽象的倫理概念・倫理理論、という三層に構造化し、それら三層間の関係を考察することでその構造を解明し、日本の生命倫理の議論の全体像を獲得するとともに、アメリカやヨーロッパの生命倫理との比較を通じて日本の生命倫理の特徴を把握する。これによって、日本の医療現場に適合する生命倫理のあり方を探究するとともに、三層構造分析を他の国の生命倫理の分析に使用可能なものへと洗練する。さらに、この分析方法は、環境倫理、情報倫理、器量倫理、技術者倫理、脳神経倫理等の他の応用倫理の諸議論の構造化にも適用可能なものである。またこの研究は、応用倫理学が単に倫理学理論や原理の「応用」としての応用倫理学ではなく、応用倫理学の扱う現場から、たとえば「日本的なケア」など新たな倫理学原理や基礎的概念が生じうることを示すことも目的としている。

3. 研究の方法

日本の生命倫理に関する諸文献を、J. ロールズが『正義の理論』で用いた反省的均衡 (Reflective Equilibrium) という方法に基づく三層構造という視点から分析する。この方法は反省的均衡をロールズのように intra personal にはなく、inter personal に用いることで議論の構造分析の方法とするものである。日本の議論の考察とともに、海外（英米、ドイツ、フランス、アジア）との比較も行う。具体的に述べると、分析対象となる文献は、これまでの日本の生命倫理における学術論文、各種法・ガイドライン、学会の倫理指針等であり、対象領域は、終末期医療、遺伝・生殖医療、精神科医療と脳神経倫理、看護倫理、生命倫理と法、制度と専門職である。それらの領域の生命倫理の議論を、三層構造（実践、具体的原理、抽象的概念あるいは倫理学理論）に分析するとともに、三層間

の相互関係を解明する。その際、本研究のメンバーの専門領域である哲学・倫理学、臨床倫理、医の倫理、法学・社会学の視点から考察を加えることで、三層構造分析による解明を現在の学術的水準に適う仕方で実質化する。

4. 研究成果

3年間にわたりメンバー相互の連携のもと、質的にも量的にも優れた研究成果を挙げた。各領域ごとに三層構造への分析をした結果、日本では欧米と比較して、第三層である抽象的概念・倫理学理論への明確な言及をする言説が、倫理学者による議論を除いて少ないこと、とくに学会の規範などではほとんど触れられないことなどが判明した。これは法よりも、拘束力は弱い但し随時修正が容易なガイドラインを重視する日本の生命倫理政策の特徴にも通じるものである。また、第2層の具体的原理の間が単純ではなく、幾層にも分化していることも検証できた。さらに、第1層と第3層が深く関係していることの認識も成果の一つである。これは、反省的均衡の方法で第1層と第3層とを連関させることがあることから納得できることである。これらにより、生命倫理における普遍性は第2層にあり、第1層は現場の特殊性を担い、第3層は普遍性を標榜する諸理論によりかえって普遍性を損なっているという構造が理解される。本研究を通じて、三層構造分析の有効性が確認され、またこの方法の洗練化も実施したことにより、この方法をアジア諸国の生命倫理に適用する研究が、H23年度からの科研費プロジェクト（基盤（B））として採択された。3年間の研究の当初は三層構造分析という方法論の吟味に時間を費やし、それ以後は生命倫理の議論の本格的な分析を行い、英文で発表するために研究成果報告書を英文で執筆するようにした。研究グループ全体の報告書としては、初年度の成果として『日本の生命倫理諸議論における基礎的概念の再検討に基づく生命倫理理論の構造化』（A4版190頁、H. 21年6月）がある。第2年度のグループ全体の成果としては『英文論集原稿と概要 Japanese Bioethics and its Structure』（A4版185頁、H. 22年8月）がある。後者の報告書を再検討することで最終的報告書を完成させた。それは *Eubios Journal of Asian and International Bioethics*, vol. 21, (1&2), January -March 2011 に掲載された。これは2号合併号で総頁数72頁のすべてを、本研究の最終成果が占めている。なお、本研究のグループ全体での成果の口頭発表としては、UNESCO-Kumamoto University Bioethics Roundtable 2nd -4th (2008-2010 Kumamoto University) での研究発表がある。

以上は研究グループ全体としての成果であるが、個別的な研究成果は学術雑誌への執筆、学会等での研究発表、著作の刊行、翻訳等多数に上っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計135件)

① T. Takahashi, 'Three Levels Structure Analysis and its Significance', *Eubios Journal of Asian and International Bioethic*, vol. 21(1&2) January-March 2011, pp. 1-5 (査読有)

② 児玉正幸「出生前診断と着床前診断」『産婦人科の実際』第59巻第13号、1702-1799 (査読有)2010

③ A. Asai et al, An Ethical and Social Examination of Dementia as Depicted in the Japanese Films, *Journal of Medical Ethics*, 35, 2009 pp39-42. (査読有)

④ D. Macer, 'Efforts to overcome the sex selection in Asia', *International Biotechnology Law*, &(3), 2009, 122-132 (査読有)

⑤ T. Takahashi, 'Japanese Bioethics and Enhancement', *International Journal of Social and Cultural Studies*, vol. 1, 2008, pp. 1-13 (査読有)

⑥ 児玉正幸：「PGDの倫理的妥当性」、『日本IVF学会誌』第11号、2008、pp. 11-16、(査読有)

[学会発表] (計120件)

① T. Takahashi, 'The Structure of Bioethics in Japan' Asian Bioethics Conference, 11th, Singapore National University, 2010. 8. 2 (Singapore)

② 稲葉一人、「終末期における法・判例・ガイドライン」第51回日本神経学会 東京国際フォーラム 2010 5. 22

③ 高橋隆雄、「ケアと正義の基底にあるもの」第48回「哲学会」東京大学法文1号館 2009. 10. 31

④ T. Takahashi, 'Consideration of the Shift in Care-Relationships', Asian Bioethics Conference 10th, 2009. 4. 27, Tehran University of Medical Sciences, (Tehran)

[図書] (計20件)

① 高橋隆雄・北村俊則編『医療の本質と変

容：伝統医療と先端医療のはざままで』九州大学出版社 2011 総頁数 378 頁

② 高橋隆雄・糸和彦編『生命という価値：その本質を問う』九州大学出版社 2009 総頁数 334 頁

③ 高橋隆雄 (単著) 『生命・環境・ケア：日本の生命倫理の可能性』九州大学出版社 2008 総頁数 270 頁

④ D. Macer (ed), *Asia-Pacific Perspectives on Bioethics Education*, UNESCO Bangkok 2008 pp. 1-220

⑤ 高橋隆雄・八幡英幸編『自己決定論のゆくえ：哲学・法学・医学の現場から』九州大学出版社 2008 総頁数 311 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 隆雄 (TAKAHASHI TAKAO)
熊本大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：00145278

(2) 研究分担者

田中 朋弘 (TANAKA TOMOHIRO)
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：90295288

八幡 英幸 (YAHATA HIDEYUKI)
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：70284718

田口 宏昭 (TAGUCHI HIROAKI)
熊本大学・理事
研究者番号：20040503

浅井 篤 (ASAI ATSUSHI)
熊本大学・大学院生命化学研究部・教授
研究者番号：80283612

板井 孝壹郎 (ITAI KOICHIRO)
宮崎大学・医学部・准教授
研究者番号：70347053

北村 俊則 (KITAMURA TOSHINORI)
熊本大学・大学院生命化学研究部・教授
研究者番号：30146716

松田 一郎 (MATSUDA ICHIRO)
北海道医療大学・学長
研究者番号：10000986

森田 敏子 (MORITA TOSHIKO)
熊本大学・大学院生命化学研究部・教授

研究者番号：30242746

稲葉 一人 (INABA KAZUTO)
中央大学・法科大学院・教授
研究者番号：80309400

トビアス バウアー (TOBIASU BAUA)
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：30398185

磯部 哲 (ISOBE TATSU)
慶應義塾大学・大学院法務研究科・准教授
研究者番号：00337453

(3) 連携研究者

ダリル メイサー (DARILU MEISA)
熊本大学・大学院社会文化科学研究科・
客員教授
研究者番号：90467994

桑 和彦 (KUME KAZUHIKO)
熊本大学・発生医学研究所・准教授
研究者番号：30251218

児玉 正幸 (KODAMA MASAYUKI)
鹿屋体育大学・体育学部・教授
研究者番号：80183342

前田 ひとみ (MAEDA HITOMI)
熊本大学・大学院生命科学研究部・教授
研究者番号：90183607

北村 総子 (KITAMURA SATOKO)
熊本大学・教育学部・非常勤講師
研究者番号：70467976